

## 「わたしはぶどうの木」

詩篇

ヨハネによる福音書

第80篇 8節～15節

第15章 5節a

説教 岡村 恒牧師

「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である」。 (5節a) 主の年2015年に、大阪教会の標語として与えられた御言葉です。

神の民ユダヤ人は、昔から自分たちのことを、《神のぶどうの木》として理解してきました。アブラハムは神に召し出され、約束の地に連れて来られました。そこには、大地にしっかりと根を張り、豊かな実を結ぶぶどうの木が茂っていました。やがてエジプトを脱出してこの約束の地に帰ってきた時、ユダヤ人は皆、神に移し替えられたぶどうの木として祝福を受けることを願いました。

主イエスは地上においでになり、嘆き苦しむ神の民をご覧になった時、深く憐れまれました。そして、いよいよ十字架にかけられる前夜、弟子たちに言われた言葉の中でも、とりわけ力強く語られた言葉が、この15章の言葉です。

『まことの神が農夫として、愛情を込めて手入れをして、豊かに実らせて下さるぶどうの木がある。わたしがそのまことのぶどうの木だ。そしてあなたがたはその枝だ』、と主は言われました。農夫がぶどうの木の手入れをする姿は、ユダヤ人がいつも目にした風景です。農夫は、良いぶどうの実が実るように一所懸命手入れをします。父なる神がおられ、御子イエス・キリストがまことのぶどうの木だと言われ、「あなたがたはその枝である」と宣言して下さいました。枝になれ、という命令や目標ではなくて、神のひとり子が宣言して下さいました。そしてこの宣言が事実となるために、主イエスは十字架にかかって下さいました。

ヨハネによる福音書は、「つながる」という言葉を繰り返し語ります。「留まる」、「結びつく」とも訳されるギリシヤ語の「μενω (メノー)」という言葉です。代々のキリスト教会は、この言葉の恵み深さを繰り返し味わい続けてきました。かつて、自力で律法を守って生き、良い枝としてキリストにしがみつくと求められた時代に、宗教改革が起こりました。主イエスが十字架に架かってまでこの宣言を実現して下さいました恵みを、宗教改革者たちは再発見しました。私たちの内の誰一人として、自分で木を選び、自力でしがみついて命を得る者などいません。農夫である神が、本来ふさわしくない枝を選びとり、命あふれる木に接ぎ木をし、手入れをして実を实らせて下さるのです。ただ神の恵みによって枝は生きると、聖書の御言葉から再び語られるようになりました。

私たちは、ただひたすら農夫の手に身を委ねて、茂らせて下さるように葉を広げて、恵みの光を受けたいのです。しかも、常に新しい枝が加えられてい

きます。一緒にぶどうの木につながられ、葉を茂らせていきます。沢山の枝と一緒にあって、農夫である神の愛情豊かな手入れを受けて、教会が、一人一人の信仰者が生きていくのです。

この農夫のお働き、ぶどうの木の豊かな命に目を留め続けていくと、一つのことになります。この私が枝とされ、主イエスにつながれたところで、神の働きが終わらないということです。農夫である神は、休むことなく働き続けておられます。新しい枝を加え続け、手入れを休むことなく葉を茂らせ、実を实らせて下さいます。この農夫がおられるので、新しい枝が加えられる《伝道のみ業(わざ)》が続いていきます。一本の枝が枯れてしまうことさえ、神はお望みにならないのです。

今週末、この聖堂で結婚式が行われますが、結婚の誓約は、神の約束である《十戒》を土台にしています。エジプトから神の民を導き出した神は、「あなたはわたしのほかに、なにもものをも神としてはならない」(出エジプト記 第20章3節)と、第一の戒めをお与えになりました。この戒めに先だって、「わたしはあなたの神、主であって、あなたをエジプトの地、奴隷の地から導き出した者である」(同2節)と宣言され、『あなたを救い出したこの私以外のものを、あなたが愛するはずなどない』と神は十戒をお与えになりました。『いのちのかぎり、堅く節操を守ることを約束する』という結婚の誓約は、神のこの宣言を聞き、神の変わることのない愛に信頼して交わす誓約です。神が一瞬たりともこの私から目を離すことなく、限りなく愛し続けて下さるので、その愛に支えられて、私たちも互いに愛し合い、仕え合って生きることができる、と信じて約束の言葉を口にします。

ぶどうの木につながれた者は、そこから離れることなど考えもしません。ここにだけ、本当の命があるからです。ただ神の深い憐れみによって選びとられ、繋がれたことを喜び、神が与えて下さる命を受け続けて生きるのです。喜びをもって葉を一杯に広げ、神の恵みを受けて生きる時、神は私たちの傍らに新しい枝を加えて下さいます。そして宣言の通り、それぞれの場所で、それぞれの仕方で葉を茂らせ、実を实らせて下さるのです。

やがて終わりの日、神は私たちひとりひとりを、尊い実として受け止め、その収穫を喜んで下さいます。主につながれた幸いを感謝しつつ、この新しい年を歩みましょう。

(記 岡村 恒)